

第十一章 保守合同へ

吉田茂の「抜打ち解散」によるこの昭和二十七年の第二十五回衆議院選挙は、大量の追放組を政界へ復帰させる一方、自由党内の吉田派と鳩山派に血を洗う争いを演じさせ、保守党内部の対立抗争をいっそう深める結果をもたらした。この対立抗争と混乱は、昭和三十年十一月の保守合同まで、絶えることなくつづいて行く。

まず選挙後の首班争いである。鳩山一郎は十月中旬、首班工作に乗りだし、「自分を首班とする内閣ならば、連立内閣をつくらずとも、他党は是々非々の態度をとってくれる」として、政局安定の可能性を訴えた。他方、吉田派は「選挙で過半数をとったのは吉田内閣に対する信頼のあらわれである」として、吉田首班を主張した。もともと鳩山にしてみれば、吉田には追放の間だけ党総裁の椅子を渡してあったつもりで、政界復帰が成れば、当然、総裁に返り咲く心算をしていたから、吉田に全くその気がないことに腹を立て、強く吉田首班に反対した。一時は正面衝突も危惧されたが、吉田・鳩山会談が成立し、吉田首班が実現した。

しかし、吉田が鳩山派を一名も内閣させなかつたので、鳩山派は吉田が約束を無視していると憤激し、党内に「民主化同盟」を結成した。三木武吉に率いられた 民同 には、吉田や執行部に反感を感じるものが結集し、不穏な動きを示した。

そこへ生じたのが、この時の組閣で蔵相から通産相に横すべりしていた池田の中小企業放言の追認である。

昭和二十七年十一月二十七日の衆議院本会議で、右派社会党代議士の加藤勤十が、二年八月も前の池田の国会答弁を再び持ちだして追及したのである。これに対して池田は、「ここではつきり申し上げますが、インフレ経済から安定経済に向かいますときに、この過渡期におきまして、迷惑その他の、普通原則に反した商売をやられた人が、五人や十人破産せられることはやむをえない お気の毒ではありませんが、やむをえないということを、はつきり申しておきます」と述べた。

加藤がこれに対して、再質問に立ち、「……一体、五人や十人の国民は死んでもいいのか」とつめ寄ったところ、池田は、「倒産から思い余って自殺をするようなことがあってお気の毒でございますが、やむをえないということははつきり申し上げます」と答弁した。

これが国会で問題にならないわけではない。野党は翌日、全野党共同で池田通産相の不信任案をつきつけ、自由党内民同派の二十五名が欠席して、不信任案は二百八票対二百一票で可決されてしまった。

代議士当選以来、四年間、蔵相、通産相と陽の当る場所にいつづけた池田は、一転して無役となった。当時の『読売新聞』は「翌日の自由党代議士会で、『自分の真意は中小企業育成のため万全の施策を進めるにあつたが、不用意な発言のため、皆様にごめいわくをおかけしたことを深くおわびする』と謝罪の言葉が述べられたが、これを支持したのは、奥村又十郎、大平正芳の両氏にすぎず、他はことごとく黙殺的態度を示した。」と書いている。

大平によると、

「池田さんは、初当選とともに蔵相になり、占領下でトジ・ラインの実行に当たった人であるから、嫉妬や反感を買うには十分な資格をもっていた。池田さんに『冷酷な政治家』という烙印を押す向きもあったし、そのようなことを歓迎する政敵もいたにちがいない。いずれにしても池田さんは、そのために野党によって不信任に問われる羽目となり、鳩山系の同調によって、不信任案が成立してしまつたのである。池田側近の私にとつては、本人と同様、手痛い打撃であつた。私は政界進出早々、まずこつした冷たい訓練のしびきを浴びたのである。」（『私の履歴書』）

民同派はこれに勢いを得、翌昭和二十八年一月二十五日の自由党大会では、吉田は佐藤栄作の幹事長任命を延期せざるをえなくなった。この問題は鳩山内閣実現の推進者である三木武吉が益谷秀次にかわって総務会長となることと抱合せて一応の妥協が成立したが、以後吉田は政策も人事も総務会を通さなければ決定できぬようになってしまった。

つづいて二月二十八日、第二の不運が吉田内閣を襲った。衆議院予算委員会において右派社会党の西村栄一が国際情勢に関する吉田の見解を求めて執拗に食い下がり、米英の首脳の見解の「ホンヤク」ではなしに「日本の総理大臣の見解が聞きたい」と迫った。吉田はよほどムシの居所が悪かったものらしい。ついに、西村をにらみつけて「無礼だ」と言い、さらに「バカヤロー」とつぶやいた。

この失言は、野党に絶好の攻撃の機会をあたえ、三月二日の衆議院本会議には、予算案の議決に先立って、「首相懲罰」という空前の動議が出され、自由党民同派と広川派の欠席によって、賛成百九十一票、反対百六十三票で成立してしまう。この広川弘禅の動きについては、『私の履歴書』の中に、大平の記述がある。

「(初)当選して上京してみると、広川農林大臣から『会いたいのので自宅まで来てくれないか』という電話があった。……私は広川さんの勧誘を一度は断つたが、広川さんはなぜか執拗に来訪を求めるのであった。そこで、……淡島のお宅を訪ねた。広川さんは長火鉢を前に、もんべ姿で坐っておられた。見るからに酒屋のおやじさんであった。その当時、広川さんは、ただ一筋に吉田系のために骨を折っておられた。やがて大きな奉賀帳を持ってきて、『何でもいいから、来訪のしるしにここに署名してくれないか』といわれるので、私は素直に署名した。ところが、それがはしなくも吉田派の署名であることが後でわかった。」

ここには、「吉田派の署名」と記してあるが、事實は「広川派」の署名であった。そのころから広川は、吉田派からの独立を策し、その勢力を拡張しようと企てていたのである。むしろ、池田の直系である大平がその計略に乗るはずはなく、署名は無効となった。

それとはかく、裏切られた吉田はただちに広川農相を罷免したが、三月十四日には、さらに野党から吉田内閣不信任案が上程され、これまた二百二十九票対二百十八票で可決され、吉田はただちに解散に踏み切った。世にいう「バカヤロ解散」である。

民同派の中心だった三木武吉は、わずか半年前に総選挙を行ったばかりの吉田が解散に踏み切ることはなかるうと考え、広川派を抱きこみ、党内工作を通じて鳩山政権をつくることを目論んでいたもので、これは三木の大笑算であった。

三木、広川らは解散後、自由党から除名され、鳩山をかついで新党を結成し、同じ「自由党」を名乗ることとなった。世間ではこれを「鳩山自由党」とか「分自党（分党派自由党）」とか呼んだ。

この「バカヤロ解散」は、占領中の昭和二十三年十二月、総司令部の示唆で行った「なれあい解散」について二度目の内閣不信任案可決による解散である。そして、三度目は、のちに述べることになる昭和五十五年五月の第二次大平内閣の時のことである。

大平は、後年自らの生命を断つことにつながる内閣不信任案可決という異常事態を、奇しくも代議士一年生の時点で体験したのであった。

「同日の夕刻、大野伴睦議長によって、『憲法第七条により衆議院を解散す。御名御璽』という詔書が読み上げられた。一瞬にして、全代議士の議席は剝奪されることになってしまったのである。

このことは私にとって、文字どおり青天の霹靂であり、無情な仕打ちでもあった。当選以来、院議に従って年賀状も出さず、選挙区と没交渉に終始していた私は、全く当惑してしまった。政治というものが、かくも非情残酷なものであることを痛いほど思い知らされた。」（『私の履歴書』）

この大平の第二回目の選挙を知っているものは誰しも口を揃えて、「あれほど苦しかった選挙はなかった」と言う。なにしろ、香川二区は三人区なのに、自由党が三人、社会党が三人、改進黨が一人、共産党が一人、無所属が一人と計九人が乱立したのである。

甥の加地一憲によれば、「四月に大雪が降って、麦がひっくりかえる中での選挙だった。たった半年で、国会報告をする間もなく、留守番も決まらずという状態やった」。

従兄の齋藤学は、「一回目は、勝手がわからないのでメチャクチャにやりまして、そのためいろいろ問題が起きたのです。その問題が解決できないうちに『バカヤロー解散』になった。もう一度頼みに行かなければならないわけですが、前に頼みにきておるのに、その後挨拶にきていない。どの面下げてと言われて、実に辛かったですな」と語っている。

志げ子夫人によると、「最大の問題はお金がないことでした。それに準備も全くできておらず、選挙も終わりの頃の四月十一日、前厚生大臣の橋本竜伍先生が応援に来てくださいましたが、予定が変更になり、それを知らせる電報を事務所のミスで見落したため、お迎えができないというような有様でした。演説会場へ行く車の中で、橋本先生が、『明日は吉田総理がいらつしやるが、奥さんはどうされるんですか』と尋ねられ、『主人が、池田さんが吉田総理を連れてこられるから迎えに行かなくていいと言っていたので、行く予定にはしておりません』と答えると、橋本先生は、『奥さん、それはまずいですよ。総理をお迎えするのだから礼をつくして行つた方がいいですよ』と言われました。そこで総理が遊説中の高知へ汽車で行きまして、同行の池田さんにお目にかかりましたが、吉田総理の歓迎準備が心配になって、観音寺の選挙事務所へ電話したところ、会場もろくなのをとっていない、出迎えの仕度もできてない、あれもしていません、これもしていません、という返事でした。これは大変なことになった、と思い、吉田さんは気に入らないと帰ってしまう人だと言っていたので、全く生きた心地がしませんでした」。

志げ子夫人が翌朝一番列車で帰り、観音寺第一高等学校の会場は使えなかつたので、急遽上高野小学校を用意して、準備ができたころ、桜の花の満開の会場には立錐の余地もないほど人が集まり、緋毛氈を敷きつめた両側には消防団員が総出で出迎る熱狂的な歓迎をしたので、吉田総理はすっかり気をよくし、予定の十五分を大幅にオーバーして、四十五分間も熱弁をふるった。このときの応援演説で、吉田首相が、大平候補を『オオダイラ君、オオダイラ君』と呼んだことは、いまでも一口話となっている。同行の応援者は、池田勇人、山口喜久一郎、愛知揆一であった。

当時の模様を選挙事務所が試みた情勢分析がいまでも残っている。

「……四万は確実に獲得する自信を得た。初盤戦以来の戦法、言論戦、宣伝戦、潜行戦、各戦法はいよいよ総決算となり、人物本位に帰着する我が候補の至誠の人大平、信用のできる大平、財政経済に長ずる大平、是非とも当選せしめ度いとの厚き自由党の信用がすぐる吉田首相一行の来援によって明らかに立証され、益々当選に一層拍車をかけた……」。

だが、四月十九日の投票日の翌日、開票状況は決して大平に有利ではなかった。事務所からは人の影が一つ減り二つ減りしていった。三位争いをしている松浦陣営では、夕方バンザイの声があがったが、翌日になって大平が危うく逆転し、ようやくにして勝利を手に入れた。

- | | | |
|----|-----------|---------|
| 一位 | 加藤常太郎(分自) | 四三、九五六票 |
| 二位 | 福田繁芳(改) | 四一、六四三票 |
| 三位 | 大平正芳(自) | 三九、四六四票 |
| 次点 | 松浦伊平(自) | 三八、三二一票 |
- 次点との差はわずかに千百四十二票であった。

この選挙は、吉田自由党百九十九名、鳩山自由党三十五名、改進黨七十六名、左派社会党七十二名、右派社会党六十六名、労働党五名、共産党一名、諸派一名、無所属十一名という結果となり、左右社会党が増加し、保守系はいずれも後退した。自由党所属の一年生議員は、五十六人中半分の二十八人が落選するという苦戦であった。吉田自由党は過半数を割ったので改進黨との提携をはかったが、同党は是非々々主義をとると称してこれを拒否、吉田はやむなく少数単独政権をつくることとなった。

五月二十一日、第五次吉田内閣は発足したが、これが吉田長期政権の最後の内閣となる。

代議士二年生の大平は、農林常任委員から大蔵常任委員にかわり、自由党幹事、青年部副部長となつて、いよいよ本格的な国会議員生活に入ることになった。と言つても、まだほんの陣笠で、もっぱら地元の世話が中心であつた。

大平は代議士生活をこう描いている。

「……金のことをいえば、これほど金のかかる商売はない。何か吉凶禍福があり、それが自分と何等かのかかりがあるとなると花輪の一つも用意しなければならぬ。何か人の集る行事があるのを聞き込めば、祝電を出したり場合によっては優勝旗やカップを寄贈したり、祝酒の二、三本を贈らねばならない場合がある。……郷里に帰れば事務所の家賃、電話代、自動車賃をはじめ宣伝費、会場費などが待っている。

……東京においては、毎日平均して十数人の来客がある。その多くは何かの要務をもつて地元から出てこられた人々である。食事時になれば、たとえ粗末な食事でも差上げるのが礼儀である。あの人にはお茶、この人には食事というわけには行かない。山程積まれた仕事を一つ一つ片付けていくには電話ばかりで足りないの、自ら出かねなければならぬ。

……秘書一人では到底仕事さばけないので、東京現地を通して二、三人の人に手伝ってもらわなければ行けない。……子供が東京に行くので、入学の世話はできないか。幸に入学できたが下宿はないか。卒業期が迫ってきたが手頃の就職口の斡旋をもらいたい。……酒屋、タバコ屋の免許を心配しろという。これにも尽くせるだけの手を尽くさねばならないが、一つの成功はそれに数倍する敵を作ることになりかねない。河川、道路、街路、港湾、漁港、溜池、用水等の改良や改修、学校の新築改築、水道工事、保育所の設置、タバコ収納所の買取や新築、植林、国立公園の認定、電気事業、その他に伴う補助金や起債の獲得という公共の仕事には、はじめて代議士としての誇りと責任を純粹に感ずるが、この仕事として予算の制約の下決して楽ではない。

税金が高すぎる、代理販売権をとれ、金融の斡旋をしる等はいよとして、この品物の売込みに協力せよ、この争いを調停しる等の注文にはいささか閉口する場合もある。朝は七時頃から電話が次々とかかる。夜は十二時過ぎまで呼び出される。ともかく一人の能力に数倍するサーヴィスが代議士には待っている。」(『素顔の代議士』)

今と変わらぬ陣笠議員の生活である。家庭の苦勞も並々ではなかった。当時は旅館やホテルに気楽に泊れる時代ではなかった。選挙区からのお客さんの多くは、自宅に泊めなければならなかった。

志げ子夫人は回想する。

「まるで私は宿屋のおかみさんのようでした。家が広がったので、十五畳と十二畳の部屋にグーツと布団をしいて、みなさんをお泊めしたんです。ある時は、広島から送ってきた牡蠣をいっぺんに二百個、フライにして揚げたことがあります。皇居奉仕団として上京してこられた団体が本郷の旅館に分宿した時は、各部屋にいちいちこあいさつに行きましたので、芸者さんになったようで、最初は涙が出るような思いをいたしました」。

また、大平は、この頃、練馬区仲町（現錦一丁目）に家を借りて、『西讀寮』と名づけ、郷里から出てくる学生たちに開放した。三百坪ほどの敷地に、三棟の家が建っているものだったが、運営は学生たちの自主管理とした。寮長のほか、寮母がいて食事の世話をしていたが、三食付きで食費の他はすべての経費は大平が負担した。

当時、在寮した香川保（現西日本放送報道制作局次長）は次のように記している。

「この寮では、常時二十名近い学生がいた。時どき、先生はご家族づれで立ち寄りされた。そんな時には、寮ではきまっつてハラはずしを作って会食したものだ。

……寮にこられた時の先生は、きまっつて私達に講義された。『これからの日本は、経済の安定をはかり、社会生活を向上させ、国際情勢に立ちおくれしないようにしなければならぬ。そのために君たちは……』というような内容であったと思う。ときには、一時間以上に及ぶこともあった。その時の先生の話は、青雲の志をいたく若者にとって、たしかに説得力があり迫力があり、感銘を受けたものだった。」（『回想録』追想編）

この寮もやがて古くなって建て直す必要に迫られたが、家主の諒解が得られず、昭和三十五年に廃止された。

昭和二十八年の夏は中央気象台開所以来の猛暑で、八月二十一日には東京では三十八度四分を記録した。大平は、暑さの中で繁忙の合間をぬいっつ、原稿用紙にせつせとペンを走らせた。原稿は十月二十日、彼の政界進出満一周年を記念し、

『財政つれづれ草』と題して出版された。出版元は、一橋大学（旧東京商大）関係の本を手掛けている如水書房である。この本は、大平自身の半生を描いたもので、「自序」には、「これは、私を廻る多くの先輩・知己・同僚に対して、私の内面の消息の一端を伝える鳩であってほしいと思っっているが、同時に財政についての断想や寸見に対する大方の高評を仰いで、自らの眼識成長の起点にしようという素志に出たものに他ならない」と記されている。B6判二百二十ページ、定価二百五十円。内容は、「農村小話」、「官僚回顧」、「財政断想」、「国会への道」、「アメリカの点描」の五章から成っている。この著書は、約二年後に加筆訂正を加えられ、新たに書きおろされた「人物観賞」と合わせ、『素顔の代議士』として、20世紀社から出版された（昭和三十一年一月刊）。

さて、この昭和二十八年七月には朝鮮休戦協定が調印され、対岸の戦火はおさまったが、日本には、米国の相互安全保障法（MSA）にもとづく対日援助受入れ問題と、それにもなう再軍備問題が生じていた。吉田首相は無役から政調会長に起用された池田をふたたび私設特使として渡米させ、池田とロバートソン米國務次官補との間で交渉が行われることになった。まるまる一カ月を費やしたこのいわゆる「池田・ロバートソン会談」で、池田は、軍事力増強を執拗に迫る米側に対して経済優先、軍事敬遠の論議を展開して、米側の要求を押さえこんだ。

一方、過半数に達しない吉田自由党は、鳩山自由党の復帰工作をねばり強く進め、十一月二十九日には鳩山一郎ら二十三名が復党、三木武吉、河野一郎ら残った八名は日本自由党を結成した。

吉田は、自由党がようやく過半数に近い勢力になったことを喜んだが、昭和二十九年の正月早々大事件が待ちかまえていた。いわゆる「造船疑獄」である。一月七日に山下汽船が検察当局の捜査を受けたのに端を発し、取調べは運輸省、船主協会、造船工業界から政界に進んだ。

容疑は佐藤幹事長、池田政調会長にも及んだ。とくに佐藤は逮捕寸前まで行ったが、四月二十一日、吉田が犬養健法相に指揮権を発動させたので、逮捕を免れた。その後は任意捜査に切り換えられたので犯罪の立証が困難となり、事件はつやむやのうちに終わることになる。

大平は、窮地に陥った池田の無実を信じつつも、池田に司直の手が及んだことを聞いて信濃町に駆けつけ、「もう政治家をやめてください。私もやめます」と池田を涙ながらにかきといた。そういう大平について、池田満枝夫人は、「大平さんは、どこか、もろいところがありました」という印象をもらしている。大学卒業当時、自分の短所として「感情二才ボシ易イ」と書いた彼には、たしかにそのような面があったのであろう。

いずれにしても、吉田の指揮権発動は世論の非難攻撃の的となり、吉田内閣の命運はもはや風前の灯だった。

昭和二十九年七月に、池田は幹事長に就任した。九月末、吉田の外遊中に、鳩山を委員長とする新党準備会が発足した。池田はその旗頭をつとめた岸信介と石橋湛山とを幹事長の権限で除名してしまう。これに対して準備会側は、吉田帰国の前々日の十一月十五日、新党創立委員会を開き、ついで鳩山系議員が衆議院から三十五名、参議院から二名離党した。こうして、改進黨、除名された岸派、および日本自由党（鳩山自由党）が合同して、十一月二十四日、反吉田を旗印とする日本民主党が結成された。総裁はむろん鳩山である。

十一月三十日に召集された臨時国会の議員の構成は、自由党百八十にたいし、日本民主党百二十、左社七十二、右社六十一であったから、野党三党だけで過半数をはるかに超える。これでは野党の内閣不信任案は可決が必至であって、選択は解散か総辞職以外にない。吉田はあくまで解散を行う決意だったが、肝心の自由党内にも解散反対の声は強く、形勢は決定的に吉田に不利となった。解散を強行するなら吉田総裁の解任をも辞さない、という党内の大勢に直面して、吉田はついに総裁の椅子を緒方竹虎副総裁にわたすことを決意し、不信任案が上程されることになった十二月七日、総辞職した。池田も幹事長の職を下りて、吉田に殉ずる。

翌々日の首班指名では、緒方と鳩山の競合となり、社会党がキャスティング・ボートを握ったが、左右両派ともに、吉田の後継者には政権は渡さぬ」として、鳩山が首班に選ばれた。

吉田の長期政権に倦んでいた国民は、鳩山内閣の出現に好感を寄せ、翌三十年二月に行われた総選挙では、二百六十四名の候補を立てた日本民主党は、過半数（二百三十四）には及ばなかったものの、五割以上議席を伸ばして百八十五とした。

それにひきかえ、自由党は議席を百十二に減らし、第二党に転落した。平和憲法護持となえる左右両派社会党も順調に票を伸ばして、合計二十一議席増の百五十六をとり、両派社会党だけでも改憲阻止に必要な三分の一の議席を確保した。

大平は、前回と同じく三位だったが、票数を約一万票伸ばして四万八千八百五十一を確保し、次点との間に一万二千六百二十九票と大きく差をつけた。前回のスレスレ当選に懲りた選挙陣営の日常活動が物を言ったのである。

第一党とはいえ過半数を持たぬ鳩山民主党内閣は、国会運営に悪戦苦闘し、とくに鳩山は、本会議や委員会でも徹底的にいじめぬかれた。この様子を見て鳩山内閣実現のために奔走してきた三木武吉も、四月十二日、保守合同のためには鳩山首班に固執せずと語るまでになり、六月には鳩山・緒方会談が実現して、保守合同の気運が一挙に盛りあがった。だが、池田、佐藤がひきいる吉田派はこの動きを必ずしも快く思わなかった。たとえ少数派となっても孤塁を守るという意見も出て、派の態度はなかなか決まらなかった。

当時の状況について、大平は後年次のように書いている。

「三木さんは高松の出身で、同郷の私に親近感をもっており、私が池田勇人の側近であることも十分に勘定に入れて、私との接触を強めてこられた。三木さんの求めによって、牛込山伏町のお宅を訪ねると、細い針金のような手で魔法壇に入ったお粥をすすりながら、『保守勢力を合同させて、衆参両院で三分の二以上の議席を確保し、現行の『占領憲法』を改正する。そうしないと、自分は死ぬに死ねない』といわれるのであった。

……三木武吉、池田勇人両氏の会談は、その年の夏から秋にかけて、私の斡旋で何回も行われた。場所は築地の『栄家』であった。しかし、両氏の話はじっくりかみ合うところまではいかなかった。

……ある日の朝、私は三木さんから一つの伝言を頼まれた。それは『今日の新党促進協議会の常任委員会では、できたら池田君は何も発言しないようにしてもらいたい。自分がそういうお願いをしておったということを伝えてくれ』というのであった。私は正直にそのことを池田さんに伝えたが、池田さんは黙って聞き流しておられた。

当日の委員会は、そんなに時間がかからなかった。その日、私は衆議院の食堂脇で三木さんと会ったが、三木さんは『ありがとう。うまくいったよ』といわれた。『私の履歴書』

池田と三木の連絡役として奔走した大平は、この年十月、地元で開かれた国会報告会で、三木武吉について次のように語っている。

「……今次の保守合同に取組んでおられる三木さんは、生命がけであり、真剣であると思います。俺は最早先が短い。もう総理大臣になろうとも思わない。唯この三木は、死ぬる前に、一つええことをして死にたい」と三木さんは口癖のようにいつている。そういえば、あの骸骨のような体躯をもって、おかゆをすすりながら、肩で息をしている三木さんである。先が短いといわれることに嘘いつわりはないと思います。また一つええことをして国家と国民に奉じたいと念慮することも、人間三木の自然の人情であろうと思われます。……その証拠に、保守合同という一つのともしびは消えなんとしても消えることなく、その燃焼をつづけているではありませんか。私は率直にいつて、三木さんの憂国の至情に敬意を表すものであります。」(『素顔の代議士』)

新党結成の話は次第に煮つまつて行つたが、総裁を誰にするかという点になると、なかなか話合いがつかない。ところが、十月十三日には、同じく合同を目指す合議をつづけていた左右社会党が、統一大会の開催にこぎつけてしまった。それに刺激された民主・自由の両党は、幹事長と総務会長の四者会談で、総裁問題をタナ上げする。総裁代行委員制という苦肉の策をとることで合意が成立し、新党の結党大会を開くこととした。総裁代行委員には、鳩山、緒方、三木、大野の四名が推された。吉田派はギリギリまで態度を保留したが、大勢には逆らえず、ついに参加を決意した。

こうして十一月十五日、保守新党「自由民主党」が結成された。幹事長が岸信介、総務会長は石井光次郎、政調会長は水田三喜男であった。以来、四半世紀余、今日までこの党は多くの試練に遭遇しながらもその統一を保ち、政権を担当しつづけてきている。

保守合同の結果、政界地図が塗りかわつたので、鳩山内閣はいったん総辞職し、十一月二十二日に第三次鳩山内閣が成立した。新総裁の選出をめぐる党の前途は多難を思わせたが、明けて三十一年一月二十八日、緒方竹虎が急死し、これによって鳩山の総裁就任が決定的となり、四月五日の党大会で四百八十九票中の三百九十四票を得て初代総裁が誕生した。

吉田派はそろって白票を投じた。

大平が政界に進出してから保守合同までの三年、それは、その後の日本政治の方向を決する決定的な時期であった。国会はしばしば怒号と暴力に溢れ、政党は離合集散を繰り返した。そうした議会政治のあり方を、彼はどのように見ていたのであろうか。保守合同の一月前到大平が記した文章がある。

「昭和二十七年四月二十八日、わが国は漸くにして独立を恢復し、主権者たる国民の手にわが国の政治がかえってきたのであるが、独立恢復後における議会のあり方には、多くの人の失望を招く節々が多い。……白昼公然暴力が横行したり、議会政治を守るべきかどうかについて深刻な議論を試みたり、戦術的に利用すべき場所としての議会の効用しか考えていない政党もある始末である。

……朝から夜まで検事局のように政敵をしばり上げる新しいマツカーシズムの場となってみたり、行政府の行動の善の上げ下げにまで干渉するというような行き過ぎを敢てしてはばからないわが国の国会である。

白亜の殿堂と赤いじゅうたんは、かかる国会のあり方に、心ある国民と共に、半ば失望をさえ感じているに違いないであろう。議会政治の危機が叫ばれる所以である。しかし、私は決して失望してはいない。ローマは一日にして成らず」といわれる。議会は必ず年と共に成長するであろうし、また成長させなければならぬ。

……権力者のなせる事が、国民に知らしむべからず寄らしむべし」とする封建政治や独裁政治の下にある国民程憐れなものはない。路傍の石まで叫ぶという公明な喧騒の中に、真実はえぐり出され腐敗は阻止されるのである。国家の運命から個人の生命財産に至るまでが誰かの手によって朝露のようにあしらわれるのではたまったものではない。議会政治を通してそれが各人の諒解の下に処理されるわけである。議会政治は、どんなに低く評価してみても最悪の事態をさける効能はもっている。そこに安全と自由と清潔が生き残る唯一の場があるのである。議会は民衆の心を映す鏡であるからであ

る。」(『素顔の代議士』)

この頃の太平について、NHKの記者だった島桂次（現NHK報道局長）は次のような思い出を記している。

「当時の私は、向う気が強く、酒びたりで、いったん飲みだすと留るところを知らず、文字通り『無法松』のような生活を続けていた。そんなある夜のことである。しこたま酒をのんで大平邸を訪れた私は、こ機嫌で、政治談義をするというより独りで勝手なことをぶっていた。こ存じのように、おとうちゃんは一滴の酒ものまず、いやな顔ひとつみせず酔っぱらいの『たわごと』に黙々と耳を傾けていた。ときおり、コンペートと綽名をつけられていた志げ子夫人が、心配そうに応接間に顔を出して、私をにらみつけていることは覚えていたが、時間のたつのも忘れてウイスキーのボトルを三分の二くらいあけたところ、ふとおとうちゃんが顔をあげていわく、『島君、もう夜が明けてしまったようだ。実は、これから羽田から飛行機で大阪に行く用事があるので失礼するよ』。このとき、さすがの私も酔いもさめてびっくり仰天し、おとうちゃんに、両手をつけて謝った。

のんだくれの駆け出し記者のたわごとを、五時間もだまって相槌をうつて聞いてくれるこの人は、いったい、どういう人なのか、これだけふところの深い忍耐強い人がいるだろうか。この時から、私はおとうちゃんがやがて必ず日本の卓越した指導者になると固く信じたのである。」（『回想録』追想編）